

潔な箇条書きで示されているのも、歯科学生が歯科医学の歴史を理解するのに役立つと思う。

本書の意義をまとめると、本書自身に価値があることと共に、歯科学生にとって有用な入門書であること、研究者のための一里塚なること、歯科医学の発展のために努力してきた先人の叡智の道がわかること、歯科医学の流れを容易に知ることができること、などである。

古代から近代までは歯科医学の資料が少ないために、医学史が中心に書かれているように見えるが、歯科医学は医学の一部として説かれている。18世紀以降は、日本における歯科医学の歴史が中心で、歯科医学の日本への移入史や歯科医学教育史や公衆歯科衛生の流れなどが詳しく説明されている。

日本の近代医学の出発はドイツ医学の採用にあったが、近代歯科医学の出発はアメリカの歯科医学を範にしている。医科歯科一元論・二元論の

見解や新設の歯科大学が多数出現した背景、現在の歯科医学教育に共用試験システムが導入されたことなどの経緯が、当時の社会情勢と絡んで示されている点も具体的でわかり易い。そのため、容易に今日に至るまでの歯科医学の全容を知ることができるので、歯科学生に限らず歯科医師の先生方にも大変有用な役割を提供してくれると思う。

本書の最後には、「人名索引」、「書名索引」、「一般（語句）索引」が付いている。これも歯科学生が国家試験やCBTの試験の準備にも役立つので、歯科大学で教師をしている者として評価したい。なお、目次には、項目ごとに担当された石井拓男氏、渋谷敏氏、西巻明彦氏の氏名が付され、責任の所在も明らかにしている。

(関根 透)

[学建書院, 〒113-0033 東京都文京区本郷2-13-13,  
TEL. 03 (3816) 3888, 2009年10月, B5判, 115頁,  
3,500円+税]

## 石井拓男・渋谷 敏・西巻明彦 著 『スタンダード歯科医学史』

我が国において、歯科医師が独立した免許を持つ職種となったのは、1906年であり、今年で104年経過したことになる。これまで、歯科医学史の教科書として出版されたもので現在入手可能なものがなく、各大学では、担当者が独自のテキストを用いて教育を行ってきた。この度、石井拓男教授らにより、初めて「歯科医学史」が刊行されたのでここに紹介することにした。

本書は、2007年に改訂された「歯科医学教授要綱」の内容に基づいて構成されており、次のような目次となっている。

1. 古代の歯科医学史
2. 中世の歯科医学史
3. ルネサンスの歯科医学史
4. ルネサンスから近代（フォシヤール以前）の歯科医学史
5. フォシヤールとアメリカの歯科

6. 解剖学の歴史
7. 外科学の発達
8. 麻酔と消毒法の発見
9. 歯科医学に貢献した発見・発明
10. 江戸時代までの日本の医療制度
11. 日本の医学の発達と蘭学の受容
12. 江戸時代の歯科医療文化
13. 日本固有の義歯と口腔ケア
14. 西洋近代歯科医学の導入
15. 歯科医師法成立から厚生省発足まで
16. 戦後の歯科衛生士誕生と歯科大新設ラッシュ
17. 戦後の歯科医学教育にかかわる制度の変遷
18. 公衆衛生歯科のあゆみ

本書は前半で、諸外国における歯科医学の歴史を時代区分に従って述べ、後半では我が国における歯科医療・歯科医学の発達の流れをたどって記

述しており、学生にとって理解しやすい内容となっている。ただ、これは類書でも同じではあるが諸外国の部分は、医学史が中心であり、歯科医学（歯科医療）はその一部として記載されているに過ぎない。近代歯科医学は、ピエール・フォシャール（1678～1761年、フランス）によって創始されたが、これらが発展したのは、19世紀になってからのアメリカであり、世界で最初の歯科医学校が1840年にアメリカ・ボルチモアに設立されたことなどが、詳しく述べられている。

我が国では明治維新以前は、独自の歯科医療が行われてきたが、1873年の医制布達以降は、近代西洋医学を中心とした医療制度が導入された。その中で、歯科医療・歯科医学は、医療・医学の一分野として位置付けられていたが、紆余曲折を経て1906年に医師法とともに歯科医師法が制定・公布され、いわゆる医歯二元論が確立して、現在に至っている。そのような中で、わが国の近代歯科医学が、アメリカ歯科医学の影響を大きく受けて、発展してきた経過が詳しく述べられ、この点がヨーロッパ、特にドイツ医学の影響の強かった医学・医療とは異なっていることが明らかにされている。

戦後の諸制度の改革については、それらが占領軍の指導に基づいてなされたものであるとされているが、それ以前から改革の動きがあり、占領は

そのきっかけの一つであったに過ぎないとする説もあり、近現代史の課題とされている<sup>1)</sup>。医療制度についても同様であり、戦前・戦中の制度が、戦後になって新憲法の施行と前後して改廃されたり、新しい制度が導入されて、現在に至っていると考えられるが、本書では、この点は簡単に触れているに過ぎない。また、総論的な通史として書かれていることから、やむを得ないと思われるが、歯科医学の各領域がどのように進歩発展してきたかについても、記述は十分ではないと思われる。このような点については、現在の学生たちによく伝えるべき事柄であると考えられるので、今後、さらに充実されることを望みたい。

いずれにしても、本書により各歯科大学において歯科医学史が教育され、巻頭の中原泉学長の推薦の序にあるように「温故知新という知恵」が普及されることを期待したい。

#### 注

- 1) 雨宮昭一. 占領と改革 (シリーズ日本近現代史⑦). 東京: 岩波書店: 2008

(宮武 光吉)

[学建書院, 〒113-0033 東京都文京区本郷2-13-13, TEL. 03 (3816) 3888, 2009年10月, B5判, 115頁, 3,500円+税]

Gabor Lukacs:

## *KAITAI SHINSHO* The single most famous Japanese book on medicine & *GEKA SŌDEN* An early very important manuscript on surgery

日本の医学や古い書物に対する著者の深い関心が伝わって来る一冊である。フランス国立科学研究センター (CNRS) の元研究ディレクターであるルカシュ博士は、この本で日本医学史に残る2つの名著『解体新書』と「外科宗伝」を取り上げている。『解体新書』に着目した理由として、十

分に解明されていない6つの課題があると述べている (翻訳作業における杉田玄白の役割、扉絵についての詳細、西洋の図書館への伝達史、印刷過程の諸問題、現存資料の所在、当時の読者による手書きのコメントなど)。榎林鎮山の「外科宗伝」を選んだのは、先行研究の問題点を示すためとい